

なごや生物多様性センター／オープン記念事業  
「なごや生物多様性センターへ行ってみよう！」

- 日時／5月12日(土)・13日(日) 10:00～15:00 ●入場／無料
- 内容／魚やカメ、パネルなどを展示します。どなたでもご自由にご覧ください。



生きもの調査体験&講演会 調査体験は事前に申し込みが必要です。

講座番号	種別	日時	内容	講師	定員
1	講演	5月12日(土) 10:30～12:00	<b>「ムシの考古学 —土に埋もれた昆虫から歴史を読む」</b> 昆虫化石から環境や生態を読み解く講師が、名古屋市史自然編纂集の経験を基に、独自の視点で、なごやの生物多様性を解き明かします。	金城学院大学 非常勤講師 なごや生物多様性センター アドバイザー 森 勇一	当日先着 50人
2	調査体験	5月12日(土) 13:00～14:30	<b>なごやのカメを捕まえてみよう</b> 生物多様性センターの横を流れる植田川に入って、タモ網やカメ罟を使って生物を捕獲し観察します。(小学4年生以上。小学4～6年生は保護者同伴)	なごや生物多様性センター長 (愛知学泉大学教授) 矢部 隆	要事前申込 30人
3	講演	5月13日(日) 10:30～12:00	<b>植物がつくる生物多様性</b> 名古屋市から東南アジアやマダガスカルまで、植物の生態や分類の謎を追って活躍する講師が、植物が作り出す生物多様性の豊かさや面白さを紹介します。	名古屋大学博物館 准教授 西田 佐知子	当日先着 50人
4	調査体験	5月13日(日) 13:00～14:30	<b>なごやのサカナを捕まえてみよう</b> 生物多様性センターの横を流れる植田川に入って、タモ網などを使って生物を捕獲し観察します。(小学4年生以上。小学4～6年生は保護者同伴)	名城大学准教授 谷口 義則	要事前申込 30人

- 調査体験の申し込み方法** 電子メール、はがき、FAX、にて、①希望講座番号②氏名(複数の場合は全員分)③住所④電話番号(あればFAX番号)——を明記の上、お申し込みください。
- 申し込み先** なごや生物多様性センター
- 締め切り** 平成24年5月1日(火)必着

※5月2日以降、なごや生物多様性センターから、ご案内を発送します。(定員を超えた場合は抽選とし、落選の場合もお知らせします。また、定員に満たない場合は継続受付をしますので、お問い合わせください)

「市民生きもの調査員」の募集

なごや生物多様性センターでは、生きものの調査などの活動を市民協働により行っており、ご参加くださる方を募集しています。詳しくはウェブで。

問い合わせ・申し込み先

- 住所：名古屋市天白区元八事五丁目230番地  
(地下鉄塩釜口2番または3番出口から徒歩5分)
- 電話：052-831-8104 ●FAX：052-839-1695
- E-mail：bdnagoya@kankyokyoku.city.nagoya.lg.jp
- 名古屋市公式ウェブサイト  
http://www.city.nagoya.jp
- 生物多様性センター
- 関連ウェブサイト  
なごや生物多様性保全活動協議会  
http://www.bdnagoya.jp



報告

平成23年度に実施した主な事業です

5月15日	「なごや生物多様性保全活動協議会」(以下、協議会)を設置
8月3日～7日	名城公園フラワープラザにて、活動展示会「みんなで守ろうなごやの生きものたち」を開催
9月2日	「なごや生物多様性センター」を設立
10月(月間)	環境学習センター(エコバルなごや)にてマンスリー活動展示会を開催
10月16日	エコバルなごやにて「講座～なごやの川やため池にすむカメたち～」を実施
10月29日	第1回生物多様性全国ミーティング。矢部隆センター長がパネリストとして登壇(環境省主催)
11月3日	大根池(天白公園内)の池干しを協議会と協働実施
平成24年1月29日	市内一斉生物調査「なごや丸ごと鳥さがし!」を協議会と協働実施
2月5日	協議会の活動報告会に合わせ、改装工事が終了したセンター事務棟を施設公開
3月10日	センター主催シンポジウム第1弾「どう向き合う?外来生物」を開催
通年	市民と行政の協働により、詳細な生物調査や外来生物防除などを実施

いのちかがやくなごや

生きものの  
シンフォニー

発行

名古屋市環境局  
なごや生物多様性  
センター

2号

平成24年3月

外来生物問題から  
なごやの自然の未来を考える  
シンポジウムを開催しました

なごや生物多様性センター主催の第1弾シンポジウム「どう向き合う?外来生物—なごやの自然の未来を考える—」が平成24年3月10日(土)、名古屋市科学館サイエンスホールで開かれ、約250人が参加しました。クワガタ博士こと五箇公一さん(国立環境研究所 主席研究員)が「なぜ外来生物は増え続けるのか?～愛知ターゲットと外来生物防除～」と題し基調講演。その後、事例報告とパネルディスカッションが行われました。



五箇公一さんの基調講演から  
「まず身近な自然を知ろう」

外来生物は、人の手で本来の生息地から違う場所に移動させられた生物です。経済のグローバル化に伴い人とモノの移動が活発化し、外来生物の増加と生態系に対する悪影響が世界的に問題になっています。

輸入大国の日本には、様々な外来生物が持ち込まれ、在来生物に対する影響が心配されています。外来生物による悪影響はなかなか予測することができませ

ん。いったん外来生物の被害が生じると、回復には膨大な時間がかかります。

まず、身近な自然がどうなっているか知ることが大切です。自然の復活力はすごい。あきらめないことです。次世代につなぐ、我々の責任でもあります。



国立環境研究所  
主席研究員  
五箇公一さん

在来クワガタが激減

幼虫が朽ち木を食べて土に返し、次の新しい木を育み、森を豊かに維持するクワガタは「山の守り神」とも言うべき存在でした。しかし、集約的農業の推進に伴い、森が切られ、山が削られ、日本のクワガタは減り、外来のクワガタが増えています。そこにはかつての生物多様性は存在しません。多様性保全のために、議論して合意形成をする必要があります。

パネルディスカッションから  
それぞれの地域で生物多様性の保全に取り組んでいる方々から発表と議論が行われました



佐久間大輔さん

菌類学から里山の構造までいろいろ取り組んでいます。産業の発展と里山環境は密接に繋がっているのでは。



大畑孝二さん

森で暮らす生物の調査・保全に力を入れています。終わりのなき戦いです。継続的に進めることが大切です。



谷口義則さん

河川では水温上昇によって外来生物が増えているので、在来生物がすみやすくなるような環境対策も必要です。



滝川正子さん

どんどん水辺を、湿地を、森を失っています。生きもののかげがえのない拠り所であることを見失ってはいけません。

# ビオでんへおいでよ!

名古屋市港区にある生きものとの共生を目的とする田んぼ。そこでは、農家の方の協力を得て、農薬を使わずに稲と田んぼの生きものを育てています。田んぼをビオトープ代わりにしているところから、「ビオでん」(ビオトープ田んぼ)というニックネームで呼ばれています。ここでの事業を指導していただいている高山博好さんに寄稿していただきました。

## バケツでの生きもの観察から始まった



市内の幼稚園・保育園では、平成21年度からバケツでの稲栽培に取り組んできました。それらの幼稚園・保育園では「生物多様性の体感」をテーマに、「稲の生長過程の観察」「稲の周辺に現れる生きものの観察」「わらないうしをわらないうしでしめ縄をつくる」という3本立てのプログラムが実施されました。一見難しいようですが稲は丈夫ですし、先生の関心があれば子どもたちの興味も続きます。

プログラムを通して園児たちは、30種類もの生きものに出会い、稲の種子がお米になること、多くの食べものは生きものであること、稲を育てると周りには生きものが多く見られることなどを体感してきました。そんな体験から食べものや命に感謝することを学んでいったようです。

## 本物の田んぼを知ってほしい



子どもたちからは、こんな発言もありました。「のうかさんはたいへんだなあ。いった

いどれだけたくさんのおにわにならべているんだろう?」

バケツで稲を育てた園児はそれが普通の育て方で、農家も何何何千ものバケツで稲作をしていると思ったようです。なんとも微笑ましい話ですが、一方で「本物の田んぼを体験させてあげなければ」と、思いました。

22年度から「ビオでん」は始まり、23年度のなごや生物多様性センターの創設とともに、園児だけでなく市民にもビオでんを体験して親しんでもらうことになりました。場所は港区南陽地区。今でもまとまって水田がある地域です。ビオでんは住宅に囲まれた一角にあり、子どもたちが訪れるおかげで地域からも注目を集めています。

## 中を堂々と歩ける田んぼ



約700平方メートルの水田の中には2m幅で十字型に稲を植えない場所を残し、2~3人並んでも稲を踏まずに歩け、生きものを観察しやすいようにしてあります。参加した親子や園児は仲よく手をつないで田んぼの中を歩きました。最初はおっかなびっくりにしていた子どもたちも、時間が経つにつれ元気にはしゃぎ回り、水と土、生きものとの触れあいを楽しみました。

実は排水路とビオでんは小さな「魚道」につながっており、ドジョウやフナは産卵のため水田に遡上してきます。それを食べようとサギ類もやってきます。生きものの営みが見られるので、大人も子どももびっくりです。



## 生きものとおアシス



田植えの頃から水の中に生きものが目立ちます。カエルが卵を産み、オタマジャクシが泳ぎ始めます。スイスイ泳ぐ大きなミジンコのような生きものがカイエビ。生きものに詳しい人でも知らないようなものも現れます。卵からかえったばかりの1cm足らずのドジョウやフナも見られます。

稲の生長とともに、生きもの数はさらに増えます。稲の害虫ともいえるのですが、セセリチョウやヒカゲチョウ、バッタ類が葉を食べています。それをエサにしようとトンボやカマキリ、クモが増えてきてバランスがとれています。大都会・名古屋には実に多くの昆虫が見られます。子どもたちは見えないような小さな生きものを手にして、質問攻めしてきます。

生きものが苦手な子どもたちもいましたが、帰りには自慢げに胸や肩にアマガエルやカマキリをとまらせています。そんな生きものと触れあえるビオでんに今年も来てください。24年度も田植え、生きもの観察、生きもの調査、稲刈り、試食会など、盛りだくさんの内容で楽しんでもらう予定です。

自然と触れあえるだけではなく、食べものを自分の手で育て収穫する喜びを味わうこともできてしまう。田んぼはまさに、日本人の原風景ともいえる場所なのです。

(耕やさない田んぼの学校エコたん主宰 高山博好)

## ビオでんで見つけた生きものたち



ウスバキトンボ



カナヘビ



クビキリギス



ツユクサ



カイエビ



ヒメヒカゲ(幼虫)



トノサマガエル

# 稲作りで感じた「みんな生きてる ~大切な命~」

富士文化幼稚園

## 生きもの誕生の瞬間を観察

平成21年より指導者の高山博好さんのもと、バケツでの稲作や稲に集まる生きものについて学んでいます。

また、22年よりビオでんで、田植え、生きもの観察会、稲刈りを親子で体験しています。その中で「命」「生きもの」「食べもの」のつながりを理屈でなく体で会得していったように思います。

いろいろな生きものが見られるようになったバケツ稲の中ですが、前年冬越しをしたヤゴが、5月になり一斉に羽化するうれしい出来事がありました。ヤゴがバケツ内に刺した割りばしを登り、背中が割れて、白くて小さいトンボが生まれ、だんだん羽やしっぽが伸びてきて、色が変わって…。その様子をみんなでじっと見守り、そして飛び立つ瞬間を、歓声と拍手で見送りました。毎日のように、イトトンボ、シオカラトンボ、そしてギンヤンマの誕生も間近に見ました。同じ頃、園舎の軒下のツバメの巣では、赤ちゃんがたくさん生まれました。そこには、毎日せっせとエサを運ぶ、お母さんツバメの姿も。

## 「いのちをたべてげんきになる」

ある日のこと、ツバメの巣の下にシオカラトンボが4匹も落ちていました。それを見た子どもたち



は巣に向かって叫びます。「ツバメのお母さんが赤ちゃんに運んできたけど、大きすぎて食べられなかったのかな? やっとシオカラトンボが生まれたのに、残すんだったら、もったいないし、かわいそうだから、もう捕らないで!」

子どもたちは、生きもの誕生に出会い、その不思議さに感動する一方、生きもの死を目の当たりにし、心を痛めることも。

「みんないのちがあるんだね。いのちをたべてげんきになるから『ありがとう』と、ばとんたつちすることなんだね。おきゅうしょくもきれいにたべます。だからいのちがげんきになったね。いのちがげんきになるのは、にんげんもだけど、むしもなんだね」。子どもたちは日記にこう書きました。

バケツ稲作りやビオでん体験を通じて、命の大切さ、命のつながりについて体と心で感じてくれたようです。

## 取組事例の募集

生物多様性保全に向けて、学校・企業・地域・グループなどで取り組まれている事例や情報をお寄せください。今後、このニュースで紹介していきます。(すべて掲載できない場合もありますのでご了承ください)

## 掲示板

### 平成24年度 ビオでん体験スケジュール

4月18日(水)	※講座「田んぼと生きもののお話」と「種蒔き」
6月2日(土)	「田植え」と「生きもの観察会」予備日(6月3日(日))
7月上旬	「生きもの観察会」と「市民生きもの調査」
10月上旬	「稲刈り」と「生きもの観察会」

※募集中! 4月18日(水)は、15時から17時までなごや生物多様性センターで開催します。ご自宅や学校で「バケツ稲」に取り組めるよう、希望者には「種もみ」をプレゼントします。

### 申し込み方法

ビオでん体験してみたいという人は、なごや生物多様性センターまでお申し込みください。詳細は、名古屋市公式ウェブサイトや広報なごやで随時お知らせしていきます。(電話番号等、連絡先は裏表紙を参照)